

水産ニュース

水産技術専門員が伝える村の水産最前線

2017年4-6月号

サケの海中飼育と放流

村内の漁港でサケの海中飼育が行われました。海中飼育の様子を伝えます。

ホタテガイの放流

野牛漁協の地撒きホタテ漁業の稚貝放流と放流前の海掃除の様子を伝えます。

豊漁コウナゴ漁

去年を大きく上回る漁獲となった白糖のコウナゴ漁。コウナゴ敷網漁を見学してきました。

立縄はどうなった？

10-12月号で紹介したコンブの立縄投入。約4か月が経ちコンブは無事に成長しているのでしょうか？

北米太平洋の漁業資源

カナダ西海岸の離島の漁業資源。太平洋の反対側にはどんな魚介類がいるのか？そして東通村との共通点や違いを見つける。

サケ海中飼育～生簀のサケ大海原へ旅立つ～

春から各漁協の生け簀に0.3-1.0gほどのサケの稚魚が搬入されました。むつ水産事務所の指導のもと約2-3週間、毎日餌をあげ、大事に1-3gほどまで育てられました。5つの漁港の生け簀で飼育された約290万尾の稚魚は太平洋に旅立ちました。東通小学校の2年生も老部川に20万尾のサケを放流しました。2年生が6年生になる約4年後に産卵のために日本に帰ってきます。サケは北太平洋のアラスカ近海で、カナダ、アラスカ、ロシアのサケと共にイカなどを食べながら大きく成長します。



生簀への収容の様子



サケ稚魚を放流する小学生

ホタテガイの放流

野牛漁協の地撒きホタテ漁業の稚貝放流がおこなわれました。放流前に稚貝を撒く海域の海掃除（耕耘）をし、海底の貝殻やホタテ稚貝の捕食者となるヒトデやウニを除去しました。中には綺麗なイタヤガイや仔ダコ、変な形のカニがいて、海底の面白い世界を垣間見れました。数日後、ホタテの稚貝が脇野沢漁協から届けられ、大きさ、性別、状態、美味な付着生物アカザラガイの付着状況を調査し、放流しました。3年後大きく成長し、皆さんの食卓に届くでしょう。



ホタテを放流する



ホタテ稚貝とアカザラガイ

数年ぶりの豊漁コウナゴ

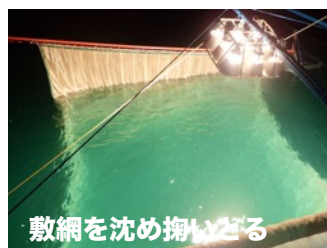
ここ数年まったく獲れていなかった白糠のコウナゴ漁が好漁になりました。せっかくの好漁の現場を見たいと船に乗せてもらい、コウナゴ敷網漁を見学させていただきました。水深6m前後の砂地の漁場にて強い光をあて、光に寄る性質を持つコウナゴがいる漁場を探っていきます。沢山コウナゴがいる漁場を探しあてると、光でコウナゴを沢山集め、海底に敷網を広げます。敷網をゆっくりと機械を使って手繰りよせ、光に集まったコウナゴを漁獲します。その場でしか食べられないコウナゴの刺身は絶品でした。白糠にある佐藤食品白糠工場ではコウナゴの佃煮の一次加工が行われていて、工場内には湯気が立ちこめ、佃煮の甘い香りが広がっていました。



獲れたてのコウナゴ



電灯でコウナゴを集める



敷網を沈め掬い取る



タモ網で掬い取る



佃煮作りの光景

投入したコンブの立縄はどうなったのか？

10-12月号で紹介したコンブ資源を増やすための立縄投入事業。投入してから約4か月が経ち、海中で立縄がどう変化しているのか見に行ってきました。投入された立縄にはコンブがしっかりと根付き成長していました。特に太平洋側の尻屋、尻労、白糠に投入された立縄は、見事なほどにコンブが密集するように生えていました。この調子で大きく成長し、コンブ資源が増加することを祈っています。



立縄上のマコンブ（岩屋）



昨年12月のコンブ幼体



尻屋に入れた立縄



種糸から生えたコンブ



尻労に入れた立縄

コラム『太平洋に浮かぶ離島ハイダグワイの漁業資源 ①』

著者が1年弱過ごし、仕事を見つけて移住したいと思っているカナダ西海岸のハイダグワイ。太平洋の反対側で見た魚や漁、そして食べ方とは？今回は魚介類を紹介する。北米太平洋には、カラフルな色をしたソイ、怪物のようなリングコッド、ヒラメが小さく見えるオヒョウ、春から秋が旬の5種のサケ、身もミソも美味しいアメリカイチョウガニ、ジャイアントケルプとブルケルプの海中林、そこに群来るタイヘイヨウニシン、海中林を食い荒らし絨毯のようにひしめくウニ、大潮が捕獲のチャンスのみズダコ。魚種のサイズが大きく、スケールの違う東通村が広がっていました。



ウニはかなり巨大



リングコッド（アイナメの仲間）



メヌケの仲間



タイヘイヨウニシン